

VITA NOVA

新 生

三 月 號

文化革命とヒユウマニズム……務臺理作(三)

民主戦線の結成とその方向……堀 眞 琴(六)

企業資本と天皇制……戸田慎太郎(九)

天皇はどのやうにして憲法を制定したか……上杉重二郎(七)

日本産業人への忠言……バートン・クレン(三)

財産税と金融資本と日銀……杉本 俊朗(四)

永井荷風の新作……正宗白鳥(七)

古鞠太夫一夕話(三)……茶谷半次郎(三)

東大回顧(濱尾山川
時代)……辰野 隆(三)

小)しらみ懺悔……川崎長太郎(四)

(説六)白金星……織田作之助(五)

戦災日録……永井荷風(五)

◇詩(菱山修三)(五) ◇海外短波(六) ◇編輯後記(五)

特價參圓十五錢

新 生 社 發 行

東京都大町
幸内
町
大
町
幸
内
町
大
町
幸
内

歌舞伎神屏

演劇興行者の方から、自顧の意味で、歌舞伎を舞臺から放逐しようとしたらしい事が新聞に報道されてゐたが、これは、日本の演劇史上、日本の藝術史上の深刻なる事件であると痛感した。日本の在來の傳統的演劇は歌舞伎である事が自明の事實であれば、そ東京の代表的劇場が「歌舞伎座」と名づけられてゐた。明治十二、三年の頃、米國から渡來した、大統領の經歷のあるグラント將軍を全部の官民を擧げて歓迎した時、特に歌舞伎を觀覽に供して、將軍を喜ばせ、將軍から興行者に宛てゝ華麗な引幕を贈られたことがあつたが、それ以來、外國から貴人名士の渡來する毎に、歡待の具として歌舞伎を利用するのが常例のやうになつてゐた。國際的に有名になつたその歌舞伎を全廢しようとするのだから、我々には意外であり不思議であるのだ。ところで、明治中期以後演劇の革新を志す人々は、この歌舞伎を邪魔もの扱ひして、この陳腐な封建的な舊劇を排斥しなければ、新時代の、清新な演劇は出現

しないと思つて、さまざまな攻撃を敢てしたものだ。が、怪物たる歌舞伎は、打たれても蹴られても沈没しなかつた。沈んだと見せかけても、またむくくと浮び上つて、元の如くに魅力發揮した。そして、攻撃をつよけてゐた新時代人も、いつの間にか、歌舞伎に魅せられてその讚美者になつたりした。

それほどの怪物歌舞伎が今度無難作に退治されるのだから、痛快と云へば痛快である。殊に、歌舞伎中の精神であつた「忠臣蔵」や「勸進帳」が先づ掃きだされると云ふのだから、舞臺史上破天荒の事である。忠臣蔵偏細氣論が笑ひ事でなく、はじめて嚴肅なる意義を有つて人に讀まれるやうになつた譯だ。

その後の新聞報道によると、全廢は行過ぎであつて放逐される者と殘留される者とが鑑別されることになつたらしいが、演劇界の眞の革命兒があるとする、戯曲作家にしろ、俳優にしろ、歌舞伎に未練を残さないで、この機會を千載一遇の機縁として純然たる新しい態度を保つて、人生味豊かな、眞の演劇を創造すべきである。云々

變な遠ひです。——え、會館には風呂はありませんでした。夏のあいだは樂屋口の階段の裏で水を浴びましたが、その後は樂屋で體を拭くだけでした。もつとも文樂座でも、近頃は燃料不足のために「本日風呂休み」といふ貼り紙がときどき出てゐました。

……舞臺で喋つてゐる時に手をたゞかれるのもイヤです。これは一つは、手が鳴るやうではまだ藝が未熟であるといふ、古く播磨縁の戒めもありますので、どうかして手の鳴らないやうにしたいと思ふ氣持からでもあるのです。……それについて、古いことですが、思ひ出す可笑しい話がございます。大正五年の儘か十二月のことでしたが、三代越路太夫さんの一席で、東京の歌舞伎座で素淨瑠璃の興行の時でした。外題は毎日替りて、私の演し物か「お夏清十郎、湊町」の日に、御ひのみが遠山連といふ連中を捲へて總見をして下さることにになりましたが、噂に聞くと、當日「湊町」のお夏の出の「遠山おしろ雪風」のところで、連中さんが揃つて手拍子を打つことに内々きまつてゐるといふのです。遠山連といふ名も、どうやらそれに因んであるらしいのです。

(ア)とオヤ—ア、ア、ア、ア、(ア)トントン、(ヤ)まア—(チチチン)

このアトントンは三味線が左の指で軽く桿をたたく間になつてゐますが、そこんところで一しよにシャン、シャンと手拍子を入れるといふ話なのです。そいつは困つたと思つたもんですから、合三味線の清六さん(先代)と相談して、その手を替へて貰ひ、當日は連中さんの裏を掻いて、はじめの方で節をのぼして、アトントンといふ間をないやうにして演りました。待ち構へた手拍子が、すかされてたゞけなかつたものでなぞ、あんな語りやうをしたのだ、と連中さんから苦情が持ち込まれましたが、こちらは、私どもはかうならつてをりますので……とシテをきつてとほしまし

古鞠太夫一夕話

(その二)

茶谷半次郎

床へ出る氣持

……どういふものでせうか。いまだに私は舞臺へ出る前は妙に氣持が重苦しくつて仕方がありません。何

かかう、あたまたかものがかぶさつてゐるやうな鬱陶しい、いやな氣持です。性分の引込み思案もありませうが、つまりはまあ固くなるのでせうな……。喋つたあとで風呂へ這入る時の暢びりした氣持などとは大

た。ごひるきから長氣をつけてやらうといふおつも
だつたのでせうが、かういふのは私には苦手です。

……興行中は、朝目を覺した時から舞臺へ出るとい
ふ氣持になつてゐます。……これはなにも私どもにか
ぎらない、藝に携はつてゐる者は皆さうなのだらうと
思ひますが、こんなしよらばいひの者は、家族の者にも
相當に氣取ひのむつかしいところがあるやうです。家
を出るまでに氣分を亂されるやうなことがあると、ど
うもその日の舞臺に障るやうに思はれます。それで家
の者も興行中は、その邊は特に氣をつけてゐるやうで

す。……松屋町の師匠(六代目廣助、後に名匠絃阿彌)
に聞いた話ですが、柳適太夫さん(初代。前名田太夫。
灘の柳嘉納の主人、素人から太夫になつた化物での近
世の天物)は家の敷居はかならず左足から踏出し、齋
六の樂屋の入口は右足から這入るときめてゐられたさ
うで、這入りかけて足順がその通りにゆかない時は、
またあと戻りして這入りなほしをしてゐられたさうで
す。……これも舞臺前の氣分を大切になさつたわけな
のでせう。——柳適さんは誰か御城能だつたので「日
向島」が大變よかつたと聞いてゐます。耳が大きかつ
たといふのは有名ですが、よく冗談に、かうしやんと
坐つて耳を引張るやうに撫でよ、かうするとよい聲か
出るのや、といはれたさうです。京都の五代目鶴澤友
次郎さん、通稱建仁寺の師匠といはれた方にお稽古を
受けられたのださうです。

……人によると、ぎりぎりにそゝくと這入つてく
るのもないではありませんが、私は許すかぎりは出演
二時間前くらいに樂屋入りをしてゐます。……さうな
んです。じつと氣持を靜めてゐたいところなので、出
演前に樂屋へお客の見へるのは、實のところ困るんで
す。といつて、のつ引ならぬ場合もあり、こつちの氣
儘ばかりもいつてゐられません。仕度にもかゝりか
けてゐれば、さういつてお断はりしてゐますが……。

……舞臺へ出る時の仕度は、足袋、下袴、腹巻、腰
巻、褌袴、着附——夏は帷子、冬は薄紗紗を私は用ひ
ます——それから上下、といふ順序で、弟子に手傳つ
て貰つて着けますが、順に一つづつ手渡してくれたり
着せかけてくれるキツカケがわるくて間がぬけたりし
ますと、氣色がわるくていけません。たとへば袴です
が、前うしろを持つて渡してくるのを、受取つて揃
いてはく……それがスツとはけるのにも渡してくる
呼吸があります。

……ふんまわし(床の廻る部分)を廻すキツカ
ケは「端場」ですと、
トン、トン、トン、トン、(ハツ)ダラダラ
ル……

と廻します。それが「切」ですと、
トン、トン、トン、トン、(ヤ)トーン、ト
ン(ン)トーン、
と間をおいて廻すのが、きまりです。すべて七五
三の間でゆきます。これも呼吸があつて、へたに廻は
されると體が揺れます。一とほりはみな稽古して
きたものです。今はめいめいの適宜でやつてゐるので
ないかと思ひますが、私はやはり、きまりどほりにや
つて貰つてゐます。

……ふん廻はしが表へ廻はつた時、見物席のザザザ
ッが耳についたり、その方へ氣が散つたりするやうな
日はうまくゆきません。それではつまり見物の方へ氣
持が吸取られるので、逆にこつちへ吸取らねば駄目な
のです。見物を押さへると申しますか、何も聞えず、
無人の境にでもゐるやうな時でない調子よくまのり
ません。……そればかりに限らず、毎日の出来、不出
來、これがまた自分の自由になりません。きのふいま
くいつたところが、かならず今日もうまくゆくとはか
ぎりません。一つは體の調子もあるのせうが、と
もかく、その日その日の風次第です。……家内がよく

私の體の具合のわるい時など、けふは手加減してお
やりなさい、といつたりしますが、さういはれたから
といつて、さて舞臺へ出たとなると、手加減など出来
るものではありません。一旦ふん廻はしに乗れば、這
入るまでは自分の體でない氣持でゐます。……精津
大塚さんでも、御自分で満足にゆくやうに語れるのは、
一と興行にせいぜい二日か三日ぐらひだといつてゐら
れたと聞きますが、私など有ていに申して、そんな日
は一日もありません。いつも自分ながら不満だらけで
す。……これは私が、つとめて人に話すやうにしてゐ
る話ですが、大塚師匠が七十七歳で「忠臣藏、九段目」
を語つてゐられた時、私が役をすまして廣助さんのお
部屋へ御挨拶にまゐりますと、恰度大塚師匠が居合は
せられてお話中でしたが、お話のなかで、なあ廣さん
わしもこんどで九度目の九段目やが、こんどはじめて
まともに本藏が語れるやうに思ふ……と大塚さんが
いはれるのを傍らで聞いて、こんなえらい人がこんな
ことをいふやうでは、淨瑠璃といふものはこれや大變
なもんだな、と思つたのを覺へてゐます。これは出来
不出来といふやうなことは少し違ひますが……。

……私は床が廻はる前に、裏側で鼻汁をかんだり、
白湯を呑んだりをさきにすましてゐます。出演中に白
湯をいたどくのは一段のあいだに二回位ときめてゐま
す。……三代越路さんの一席で帝劇へ出ました折、遊
澤さんが越路さんに、義太夫の太夫は舞臺へ出て淨瑠
璃にかゝる前に、カーツアツと吸は吐く、鼻汁はかむ
湯は呑む、どうしてあゝ行儀のわるい騒々しいことを
するんだらう。出る前にやつたらよさうなものだ、
といはれたさうで、越路さんもそれには一應辯明はま
されたものゝ、遊澤さんのいはれるのも尤と思はれたの
でせう。その後はよほど氣をつけてゐられたやうに見
受けました。私も實はその時にその話を聞いて以來、
出る前にすますやうにしてゐるのです。今でも相變も

ずやつてゐる人はやつてゐるので、私も同じに思はれてゐるかも知れませんが……。先代清六さんが、私が滿洲へ巡業にいつてゐた留守中に弾いてゐられた太夫のことを、こつちは向ふの語つてゐるあいだ中、息をつめてやつてゐるのに、向ふは三味線のあいだは、こつちに構はず鼻汁をかんだり、湯を呑んだりして、まるで息を抜いてゐる。もう、こんどから弾いたれへん、とひどく憤慨してゐられたことがありました。淨瑠璃は、一段の内の前半段は太夫が聴かせ、あと半段は三味線を弾かすやうに節付が出来てゐます。お俊傳兵衛の「堀川」などを聴きになれば、それがハツキョお判りになりませう。後半は三味線にわたして、太夫はサラサラとした氣味合ひで語るのが定法です。が一段を通して、語りだけのあいだも三味線は息をつめてゐなければならず、三味線だけの時だからといつて太夫が息を抜いてはならないのはもちろんです。一段のあいだに白濁をいたたく箇所はだいたい決まつてゐます。湯加減を考へ、その頃合ひを計つて汲んで出して置く、これは弟子の役目ですが、これも慣れないと、なかなか恰度によれません。

……口上ですか？ 會館の興行の時から人が替つてゐます。焼ける前まで古くやつてゐたのは、小道具の兵次といふ者ですが、淡路へ疎開したまゝ戻りません。こんどのもやはり小道具の者で萬次郎といひます。替つた當座しほらくはなんとなく勝手が違ふやうで、しつくりいぢしませんでした。今ではスツカリ板についてきまして、氣にならなくなりました。口上といへば、御靈文樂座時代に玉禪といふ老人が長らくやつてゐましたが、この人は上手でした。玉造さんの弟子たつたのですが、人形はからつきしへたで自分でも、親方は日本一の人形遣ひ、わしは人形は蕪べたやが、そのかわり口上はしたらわしが日本一や、と御愛嬌な氣風をあげてゐました。寝惚けたやうな聲で

やるのですが、それがまた文樂座の氣分にしつくり眠つてゐました。御靈時代には、トヤぶれといふものもやつてゐました。口上にすぐつてゐる表の方でやるのですが「何々太夫場ア」といつてゐるのが、ぼやけたいひ方をするので「何々太夫さま」に聞こへ、文樂では自分とこの太夫にサマをつけてゐる、などその頃よくいはれたものです。あれなども今でもあつたと面白いですがね……。

人形ごの咄合ひ

……榮三君も致くなりましたね……。榮三君は、はじめ光榮と名乗つて島の内の下大和橋の濱の澤の席へ出たのを振出しに、彦六から文樂へ来た人で、一生師匠なしでとほした人ですが、大玉造さんの足を遣つてゐたこともあり、先代紋十郎さん、二代玉造さん、多爲造さん——門造君など、この多爲造さんを近世の名人だと崇拜してゐます——などの藝を充分腹にたつき込んで、それに自分の工夫を積んできたのであらうと思ひます。どこまでも理詰めにものを考へるたちで、人形の方では讀む人は少いのですが、五行本も讀んでゐました。……榮三君はそれに相談の出来る人でした。御承知のやうに私は息が短いので、話し合ひをして人形の仕勝手を替へて貰ふことも時々ありました。……「新口村」の孫右衛門が忠兵衛に逢ふところの、

……「慮外ながらとめんない千鳥——」

で梅川にして貰ふ目かくしを、必ずこなたの連合に、物いはして下さるなど、僞ぶ中に忠兵衛は、嬉し餘り馳出で、互に手と手を取かへせど、互に親共我子共、云はずいはれぬ世の義理は、——

で、これまでだと、孫右衛門があげたり下げたりして忠兵衛の顔を覗きますが、そこんとこで、人形の仕

料で見物がドツときます。——そんなチエグリは淨瑠璃の方にだつてあるにはあります。うちの師匠（二世竹本津太夫、後に七世綱太夫）なんかも「城本屋」の庄兵衛の意見で、例の越中ふんごしの可笑味の入れ方をしられました。……本を持つてきませう。

（ツと坐を立つた師は、やがて離れた部屋から、小聲で淨瑠璃の節を口吟みながら廊下を引返へして行く。——舞臺生活六十年、淨瑠璃は長い忍苦の修業の對象であつたに拘はらず、一面には失はず師が有つてゐる、好事の徒のそれにも通ふ、かけかまひのない淨瑠璃を羨しむ心を碎けていへば淨瑠璃が「好き」である牛地を、不用意に見せるもの、やうに思はれ、何ごうもない廊下の微吟に、筆者は思はず耳を聳だて、師に氣安い近寄りを感ずるのであつた。）

——この「そして、肝腎はあのそれだ、どんなことをしるなら」のあとへ「オおれが越中ふんごしを賣してやる、女の越中ふんごしした尻つき見たりや、なんぼ惚れた男でも、愛想つかすは知れたこつちや」と人れ言を言はれたのです。いゝ加減卑猥な文句ですが、昔の見物はこの位のことは、平氣で笑つてすましてゐられたやうです。見物を笑はせやうといふのでは、それもこれも變りはないわけですが——こちらにするとせつかく語り込んできた大事なことので、ドツとこられるのはどうも困るので、そこるところをなんとか替へて貰ふ工夫はないかと私の方でいつたもんで、榮三君は文五郎君と二人で相談して、親子が抱き合ふうしろから、梅川がそつと近付いて孫右衛門の目かくしを取るといふ只今やつてゐる型に替へてくれたのです。文五郎君もあのとほり淡白な人ですので、相談の筋がとほつてゐれば、よろしい、そないやりますよ、といつても氣持よく引受けてくれます。……しかし、榮三君が致くなつたとすると、こんどはまたあとの人が、どんな風にやりますかな……。

なつたら、ひとにウマイとかかんとかふて褒められ
たら、クッ、れてると思ふて勉強せなかん、といつ
て諭して下さいました。……いつも少し吃り氣味に、

口の内仰つしやるやうなものいひ方をなさるの
で、聞取り憤り時がありました。後にまた稱庵座出齣
中、忠臣蔵の「天川屋」の口、「人形廻はし」を稽古し
て戴きました。この時は清水町へ伺ひました。……清
水町の師匠に拵へ貰つたといふだけで箱がつくの
で、誰も彼もが稽古に押しかける時代でした。

……團平さんの日常は、萬事を間でゆくといふ寸法
でした。舞臺のお仕度は勿論のこと、常のお召替への
時でも、介添へに間が要りました。羽織一つ着せかけ
るにしても、間を計つてヌツと持つてゆかないといけ
ません。その間かわると、肩をゆすつてズリ落として、
もう一度着せ直しをさしてゐられました。……小
柄で細つそりした方でしたが、旅に出られる時など、
黒縮緬の着物に羽織、女のお高僧頭巾をかぶつた上に
また山高帽をかぶるといふ珍な扮装をされました。そ
れにどういふわけか、履物はいつも薄いコツポリ下駄
でした。山高帽のリボンの正面のところに赤切符を挟ん
でゐられました。……或る時も、團平さんがその扮装
で、三等の待合室に控へてゐられるところへ、帽子の
横に青切符を挟んでやつてきた春子さん、伊達さんた
ちが、團平さんが赤切符なのに當惑して、

「お師匠はん、今日は二等やおまへんのか？」

「二等やつたら早よ着くか？」
この反問に降散して、しようがないなあ、といふ顔
を見合はしながら、皆々三等のお附合ひをされました
が、傍で見てゐる私は内心可笑しくて仕方ありませ
んでした。團平さんは時々こんな皮肉を仰つしやるの
でした。

……明治二十八年、十八歳の時、養家を不躰とな
り、私はまた金形家へ復讐いたしました。(つよく)

たらちねの母をうしなふ

——五章—— 麓山修三

この日暮れ、歩き渡れて、母はベッドの上で、しづ
かに永い眠りに就いた。

辛抱に辛抱をかされて、なんのために、一生蕪、彼
女は歩いて来たのだから、

優しい彼女の影は、いまでも、どの町の、どの町角に、
重い杖をひいてゐるだらう、

四方を壁に閉ざされ、彼女も僕のために、大きな一
冊の本を書いた。

本はいまもこの眼の前に開かれてゐる。
それなのに、僕はその貴重な頁を、讀みつくすこと
が出来ぬ。

外 出

暮れ方、老いた母の履きものが支關の、三和土の上
に揃つてゐる。これから、ひとり、どこへ出かけよ
うといふのだから、よく、いそいそと、好きな芝居
へ出かけたが、大方その芝居もなくつたので、もう
行く處かどこにもない！

暗くなると、迎へに来た優しい天使にその手を取ら
れて、もうよそ行きの草履を穿かずに、母はまつすぐ
に天へ上つてしまつた。燈火を消した部屋のなかに僕
一人を残して。

私 の 肩 は 重 い

私の肩は重い。私の肩はいつも重い。その日その日
の、夢想と仕事と生計とで。
母はいつも何を希望してゐたらう？ 何を期待して
ゐたらう？

ともすればその希望、その期待を、なぜ、私だけに
かけたのだから。私だけに。
私の肩は重い。ああ、誰だつて肩は重い！
ともすれば事ごとに、母の希望も期待もはづれた。
可哀さうに、彼女も、希望はだんだん小さくした、
期待はだんだん少くした、

重い病氣のベッドのなかで、
「我慢をしたのだよ。出来るだけ我慢をしたのだよ。」

と、彼女は云つた。

さうして本當に草臥れてしまつた。
草臥れはてた母をかかへて、どう仕様もなく、私の
肩は重い……

遠 雷

長い病氣のベッドのなかで、母親が云つた。
「死ぬときにはお前を一緒に連れていかうか、一
人で残すのは心配だから。」

息子は黙つてうなづいた。

重い病氣のベッドのなかで、母親が云つた。
「わたくしが死んだら、どうするだらう！」

「それは困りますよ。」と、息子は云つた。本當に
困ると思ひながら。

死に間近いベッドのなかで、母親が云つた。
「嫁を買つておくれ。嫁を買ふ氣分になつておくれ、
いまの氣分もかはるからな。」

「ええ、さうします。さうするから、お母さんも直つ
て下さい。」と、息子は云つた。もうちぎ死ねとは少
しも知らずに。

それから最後に、母親が云つた。
「どうなつても、生きのびておくれ。どこまでも
生きのびておくれ。」

息子は黙つてうなづいた。

杖

黒檀に象牙の柄を据えた、指揮棒のやうに細身の杖。
常日頃母の用ひたその杖を、僕は、この手に取つて見
る。

町で夕餉を共にして、――その頃そんな習はしもあ
つた――通りすがりの、とある店で、この杖も、母の
このみそのままに買ひとつた。なんとはなしに愉しい夕
暮れに、思ひがけなく、かさなる満足！すがすがし
いまでに綺麗な彼女の顔。

その店も、その町も共に、空怖ろしい廢墟のなかに、
跡形もなく消えてしまつたが、この杖を見てゐると、
賑かだつたその頃の、生き生きとした町の音が、不意
に遊音のやうに寄せて来る――